

TOPICS 今号のトピックス

- 番組上映会&公開セミナー『3・11大震災、そして福島原発事故を忘れない!』
- 公開セミナー 第34回名作の舞台裏『カーネーション』
- 公開トークショー 第10回人気番組メモリー『日曜美術館』
- 『水木洋子秀作テレビドラマを見る会』『ちびまる子ちゃんの世界展』ほか
- 第2回理事会で平成25年度事業計画ならびに収支予算が決定

■番組上映会&公開セミナー 『3・11大震災、そして福島原発事故を忘れない!最新受賞番組から』

■東日本大震災から2年目の3月、各賞受賞の番組上映会を実施

東日本大震災と福島原発事故から2年目を迎える3月5日から17日まで、放送ライブラリー施設内で番組上映会を実施した。上映番組は、昨年日本民間放送連盟賞と日本放送文化大賞を受賞した7番組。全12日間に444人が参加し、参加者からは「福井出身だが、知らないことがたくさんあった。地方局の番組を見る機会がありとてもよかった」「津波で実家が流された。被災地のことを理解し、被災地の方々に寄り添ってもらえる機会だと思う。今後も上映会を開催されるとありがたい」などの感想が寄せられた。

【上映番組】 ☆印は、公開セミナーの登壇者関連番組
Aプログラム「大震災と復興に向けて」

JNNルポルタージュ「3・11大震災 記者たちの眼差し」
TBSテレビ/JNN・日本民間放送連盟賞テレビ報道番組優秀
「NNNDキュメント11 3・11大震災シリーズ14ひまわりの咲いた夏～大川小・津波に消えた命～」

宮城テレビ放送・第8回日本放送文化大賞グランプリ候補番組
「復興の狭間で～神戸 まちづくりの教訓～」☆

朝日放送・日本民間放送連盟賞テレビ報道番組優秀
「夢の始まり～甘くてしょっぱい かりんとう人生～」

山陰中央テレビ放送・日本民間放送連盟賞テレビ教養番組優秀
Bプログラム「福島原発事故関連」

「原発水素爆発 わたしたちはどう伝えたか II」

福島中央テレビ放送・日本民間放送連盟賞テレビ教養番組優秀
「闘う先生」☆

福島放送・日本民間放送連盟賞テレビ教養番組優秀

「原発のまちに生まれて～誘致50年 福井の苦悩～」☆

福井テレビジョン放送・第8回日本放送文化大賞準グランプリ

※JNNルポルタージュ「3・11大震災 記者たちの眼差し」は、4月23日から放送ライブラリー公開番組に追加された。

■公開セミナー 制作者に聞く!を東京で開催

公開セミナーは、3月9日、東京都千代田区の千代田放送会館ホールで行われた。午前中から登壇者3人の制作した番組を全編上映し、午後2時から、震災後2年間の復興の現状や原発事故後の課題などをテーマに、トークが展開された。

登壇者は、福島放送報道制作局の高橋良明さん、福井テレビジョン放送報道局の宮川裕之さん、朝日放送報道局の西村美智子さん、司会進行は放送作家の石井彰さんの4人。



第1部の番組上映には40人が参加、第2部には、放送関係者、大学関係者、学生や一般市民など80人が参加した。

復興に向けての制作者の思い



最初に司会の石井さんからの「なぜこの番組を作ったのか」の問いかけに、福島放送の高橋記者は「私は南相馬市には思い入れがあり、高橋先生を取材する際も最初は屋内退避区域で入れなかった。南相馬の市長も『マスコミはみんな逃げた、マスコミの本性を知った』と言っていた程で、言い訳ができない状況の中で、罪滅ぼしというか、南相馬の現状をたくさん伝えたいという思いがあった」と語った。高橋記者が制作した『闘う先生』は、原発事故後も南相馬市に残って診療を続けた産婦人科医の高橋亮平医師を追った作品。高橋医師が自らのがんが見つかって、抗がん剤を打ちながら地域医療を守る姿を記録した。

続いて、朝日放送の西村記者は、
「東日本大震災が起きた時、阪神・淡路大震災はこれで終わるなという危機感があったことと、阪神・淡路の復興の失敗を全国に伝えることで、東北の復興が成功するための一歩を踏み出せるようにとの視点からだった」と述べた。西村記者が制作した『復興の狭間で』は、阪神・淡路大震災の復興のシンボルといわれる神戸市長田区の高層ビル群に位置する商店街を取材し、再開発の現状と課題を通して、宮城県気仙沼市の復興計画のあり方を問いかけた作品。





福井テレビジョン放送の宮川記者が制作した『原発のまちに生まれて』は、全国最多の14基の原発を抱える福井県に自身が生まれ育ったことから、原発の立地に至った経緯や地元で暮らす人々の葛藤や原発政策の矛盾などを追った。

宮川記者は「地元では原発に対していいものだ、悪いものだと言えない雰囲気があり、取材を受けてくれる方がなかなか見つからなかった。そこでプロデューサーと話し合っ、自分自身が一つ一つを探って調べていく手法を取り入れた」と制作秘話を披露した。

■原発関連を伝えるスタンス

福島原発事故に遭遇した地元局の高橋記者は「東京電力は大スポンサーで、原発事故前まで私自身も“マリーゼ”という女子サッカーチームの取材をしていて、それから開放された。原発の検証番組など作れる状況ではなく、僕らもその十字架を背負っている、加害者の片棒を担いでいる、と県民から見られてもしょうがないと思う」と心情を語った。

福井テレビの宮川記者は「福井県のメディアとして、原発の問題を避けて通れない、真摯に向き合うことが東日本大震災を考える福井なりの視点だ、という覚悟があった。言葉は悪いが、これからの日本、福井を考えていく絶好のチャンスで、ここを避けるわけにはいかない、と思った」と述べた。

■風化していくことに、どのように抗していくか



石井さんから「忘れたくないという人達がいて、もう一方にはメディアは、悲惨な記憶を風化させてはいけない、という使命感との間で悩むことはないか」との問いに、宮川記者は「マスコミの立場として風化させない、続けていくこと、継続

報道が僕らに課せられた使命ではないか」と強調した。高橋記者は「作る人の今が反映されている、お互いに今思っていることをぶつけ合う、その瞬間が切り取れるなら新しいものになるとの希望を持っている」と語った。

西村記者は「阪神・淡路を忘れることは仕方ないが、今回の大震災を使って言うべきことは言う、風化していないという工夫をしていけばいいのではないかと述べた。

最後に石井さんは「震災報道の意味、テレビができること、できないことなど、また話し合う機会を作って欲しいと願っている」と結んだ。

参加者からは「作品を見てからトークを聞いたことで、広い視野で震災後のこれからを知ることができた」「番組の作り手側の話はなかなか聴けないので、興味深かった。司会も軽妙で耳に心地よく、素晴らしいと思った」などだった。

放送番組センターでは“東日本大震災と放送”をテーマに、2011年9・10月にTBS・JNN系列、2012年3月には日本テレビ・NNN系列の関連番組の上映会と公開セミナーを開催しており、今回はこのシリーズの第3弾に当たる。

■公開セミナー 第34回名作の舞台裏『カーネーション』

番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」第34回は、デザイナー・コシノ三姉妹の母親である小篠綾子さんをモデルにした連続テレビ小説『カーネーション』（2011・NHK）を取り上げ、コシノヒロコさん・ジュンコさんの出身校である文化服装学院（新宿）で開催した（3月16日）。

【登壇者】 尾野真千子（出演）、上杉 祥三（出演）
城谷 厚司（制作）、田中 健二（演出）

【司会】 渡辺 紘史（放送人の会）



城谷氏が選んだ『カーネーション』4本を上映後、ゲストのトークを開始。城谷氏は「まず、小篠綾子さんをモデルに何か描いてみたい

というアイデアがあり、それを脚本の渡辺あやさんに提案したらすぐ乗ってくれた。タイトルも『ドレス』など色々候補があったが、渡辺さんが『カーネーション』が良いということで決まった」とスタート当時を振り返った。主役である小原糸子役は、2000人近い応募者からオーディションで尾野さんに決定。田中氏は「名前のある女優も何人か残っていたが、尾野さんが圧倒的に良かったのは、男らしい“大阪のおばちゃん”だったこと」と、その理由を説明した。

尾野さんは、「朝ドラに出れば有名になって、親にもこの仕事を認められる。ずっと憧れていた」と笑いながらも、「糸子は色に例えるとまさにカーネーションの赤。自分の中で、ものすごく燃えていた」と話す。ナレーションも糸子本人による喋りだったが、これは連続テレビ小説では珍しい作り。「単純なナレーションと言うより、ほとんどセリフのようだった。収録する部屋で一人芝居をしていたようなもの」と語った。

糸子が親に「洋服店を開きたい」と告げるシーンでは、怒った父・善作に本当に頬を殴られるという体当たりで演じた。「自分の中の区切りとしても、このシーンだけは本当に殴ってほしかったので、善作役の



尾野 真千子



小林薫さんと相談して二人だけで決めた」と尾野さん。「本当に殴るとは誰も知らなかったから驚いたが、リハーサルを見ながら感動で泣けてきた」と上杉氏。城谷氏は「叩かれた悲しみだけで終わるのではなく、あの後のシーンで糸子はその悲しみをどう乗り越えるか考えるまでを描いた。悲しみから立ち上がるからこそ、このドラマ

で本当にやりたかったこと」と続けた。

洋裁師でありながら着物姿を通した糸子については「糸子は自分がいい服を着るのではなく、他人を綺麗にすることが好きな人。自分の格好は仕事がしやすければ良く、いかに女性を美しく見せる洋服を作るかということだけを考えていたから」と城谷氏。また、「脚本の渡辺さんは、人物や人間関係に嘘のない描き方をしていた。彼女は脚本に、自分にあてはめた人物を登場させるということをせず、物語を常に外側から見ている。だからこそ登場人物が皆自立し、正直に、客観的に描けていたのでは」と語った。



尾野さんが出演した最後の回は、岸和田のだんじり祭の日が舞台。「物語としては、“だんじりの日に皆で集まって酒を飲んだ”というだけ。けれど上杉さんをはじめ多くのレギュラーの出演が最後の回なので、今までのおさらいのように様々な人物を登場させた」と田中氏。「この後、糸子は70歳、80歳と年をとっていくが、その年齢を自然に演じられる人をお願いすることに最初から決まっていた」と話す城谷氏に対し、尾野さんは「一生分の糸子を演じたい気持ちもありながら、皺を描いたり腰を曲げたりした自分が70歳を演じると、やはりどこかおかしくなってしまうと思った」と複雑な胸のうちを語った。

「朝ドラは4本目だが、ここまで素敵な作品とはなかなか出会えない。スタッフも出演者も最高の、本当に楽しい現場だった」と上杉氏。城谷氏は「良い作品というのは、生まれた時、作られ方、見られ方といった歴史のすべてが良いものであってこそ、皆に届く。そこに“妥協”という歴史を刻んでは絶対にいけないと、渡辺さんと最初に話し合った。作っている最中は必死だったが、今本当にやって良かったと思う」と締めくくった。放送終了後1年経っても、未だ熱いファンに支持され続けているこの作品。会場を埋め尽くした500人の参加者からは、惜しめない拍手が送られた。



■公開トークショー 第10回人気番組メモリー『日曜美術館』

3月20日、教育・教養、バラエティ等のジャンルでスタッフや出演者が番組を振り返る公開トークショー「人気番組メモリー」を開催した。今回は、1976年に始まり現在も放送中の長寿番組『日曜美術館』（NHK）を取り上げた。

【登壇者】 太田 治子（出演）、千住 明（出演）
西松 典宏（演出）、小河原正己（制作）

【司 会】 加賀美幸子（放送人の会）



登壇したのは、初代キャスターで美術関係の著書も多い作家の太田氏、現キャスターで作曲家の千住氏。西松氏は20数年間制作に携わり、小河原氏は番組の転換期となった80年代半ばのプロデューサー。トークショー全体の進行を務めた加賀美氏も番組の元キャスターで、『日曜美術館』の前

身『日曜大学』や『教養特集』の美術版も担当しており、長い番組の歴史を語るに相応しい顔ぶれが揃った。

番組開始当初は「私と〇〇」というテーマで、作家などの著名人が好きな画家や彫刻家について語るという形をとっていた。「大作家たちが自らをさらけ出し、時に涙しながら話してくれた」と太田氏。西松氏も「作品や作家の経歴を専門家が紹介するのが“美術番組”と思いがちだが、美を鑑賞するのは一般の人。専門ではない人が語ることで、視聴者も等身大に理解できたのでは」と語った。小河原氏が、それまで無名だった奄美在住の画家・田中一村をとり上げた時は、美術界からは黙殺、非難されたが、視聴者からは1000通を超える大きな反響があったという。

2011年から2年間キャスターを務め、この3月で交代となった千住氏にとっては、震災と美術の関係が重いテーマとなった。「番組で何を伝えればいいのか、美術や音楽にはどういう役割があるのか自問し続けた」という。また「美術を見つめることで音楽も見えてきた。この番組で出会った作家や作品から多くのヒントを得、作曲家として進むべき道が確たるものとなった」とも。

各登壇者の「思い出の1本」や「私と〇〇」も、映像や画像をふんだんに使用して紹介され、充実した内容のトークショーとなった。

■『水木洋子秀作テレビドラマを見る会』

千葉県市川市が顕彰事業を行っている脚本家・水木洋子の作品を見る会を、2/20（水）から2/22（金）まで市川市映像文化センターで開催した。

『出前上映会 & セミナー』と題し、放送ライブラリーが公開している水木洋子脚本のテレビドラマ7本を上映したほか、2/20（水）にはコラムニスト・泉麻人氏による公開セミナー「昭和テレビドラマの楽しみ方」を実施した。セミナーでは、テレビ番組情報誌の記者だった泉氏が、独自の発想と着眼点によるドラマ鑑賞の方法を披露。見方を変えることによって1本のドラマも違う楽しみ方ができることを、今も多くの人の記憶に残る昭和の名作ドラマを例に挙げながら語った。3日間でのべ300人近くの来場者があり、『他の水木作品も見たい』『このような上映会やセミナーを今後も実施してほしい』などの感想が寄せられた。



この展示会では、アニメができるまでの制作現場を、写真や映像で紹介するほか、原作者さくらももこによる直筆の登場人物紹介や、さくら家の玄関を再現した写真スポット、実際の放送で使われたセル画、歴代のオープニング／エンディング曲などを紹介した。着ぐるみとの握手会や砂絵教室等も開催し、多くの家族連れや子供達で賑わった。視聴ホールでは「ちびまる子ちゃん」の周年番組などを新たに3本追加公開した。企画展見学の後、番組を視聴する来場者の姿も目立った。



■『2013春の人気番組展』開催中

4/12（金）から5/19（日）まで、春秋恒例の企画展「2013春の人気番組展」開催中。

■BL・クリエイター支援サービス利用状況

昨年9月15日の運用開始から3月30日までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組 2,733 本、ラジオ番組 744 本

◇利用登録者数 88 社 412 人

◇視聴実績 テレビ番組 1,806 回、ラジオ番組 183 回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで（TEL:045-222-2881）。

■『ちびまる子ちゃんの世界展』

国民的テレビアニメ『ちびまる子ちゃん』の魅力を紹介する企画展を2/8（金）～4/7（日）の期間、開催した。

昭和40年代の清水市を舞台に、まる子の家族や友人とのほのぼのとした日常生活を心温まるストーリーで描いているのが、人気の『ちびまる子ちゃん』。フジテレビ系列でアニメシリーズがスタートしてから、今年で23年目を迎える。

■第2回理事会で平成25年度事業計画ならびに収支予算が決定

3月4日に、第2回番組保存委員会と第3回事業運営委員会が開催された。

番組保存委員会では、テレビ保存対象番組として平成22年度に放送された番組を対象にNHK、民放135社の合計1,498本が選定された。また、ラジオ保存対象番組として平成23年度と24年度に放送された各賞の参加・受賞番組を中心に、NHK、民放局93社の合計376本が選定された。さらに、番組の収集、保存、公開の充実策について説明、了承された。

事業運営委員会では、平成25年度事業計画ならびに収支予算について説明、理事会に諮ることが了承された。

3月15日開催の第2回理事会では、両委員会の報告が了承され、平成25年度事業計画ならびに収支予算が諮られ、いずれも承認された。

平成25年度の事業計画ならびに収支予算の概要は次の通りである。

〔平成25年度事業計画〕

公益財団法人に移行して2年目を迎える平成25年度は、24年11月に決定した「向こう5年間の放送番組センター事業方針」に基づいて、「公開番組の充実と利活用の推進」「事業の全国展開」「放送ライブラリー事業の存在感を高める」ことを重点テーマとして事業を実施する。具体的な事業計画の主なポイントは次の通りである。

保存対象に選定した番組の収集、ファイル化等の作業を促進、公開番組の増加を図り、テレビ番組1,000本、ラジオ番組200本の公開追加を目指す。

毎年度の保存選定とともに、受賞番組、地方局の優れた番組、放送事業者が公開を希望する番組などを随時受け入れ、速やかに公開する体制を構築する。

各地の図書館、公共施設などにおいて番組の公開を実施していくため、著作権処理、肖像権等への対応、視聴システムなどについて検討し、年度内にサテライト・ライブラリーを設置し、試験運用を開始する。

前年度に開催した「市川森一・上映展示会 夢の軌跡」は、4月上旬から5月末まで長崎歴史文化博物館、6月初旬から諫早市立図書館に巡回する。

テレビ放送開始60周年を記念して、保存番組を活用した放送の歴史と未来を考える公開セミナー、番組上映会などを開催し、放送文化に対する一般の理解を深める。

財政面では、民放とNHKの出捐削減に対応するため、基本財産の運用収益の改善に努め、債券売却益を基本財産に繰り入れ、年度内に基本財産を97億円にするとともに、利率2%の運用を維持し、運用益1億9千万円を確保することを目標とする。また、賛助金の拡充に向けて、地上波以外の放送事業者、放送機器メーカー等に賛助員への加入をお願いしていくための準備に着手する。